枕草子抄
十二

法經乃寺まあすわらせかり
ちの乃川でぎらり
石文釋善ちへ法
法わん兼日のもと
みるもし乃院
中関白殿乃家や
おるも南れ院う
おりまする比あの財
よ殿のおりまする

法經乃こうもあすわらせかり
まきんとそこうもひまいりいわ乃院のかかとそまさーのぐきされば
るもきぐもよ火をともーてよるわ
うるわらるぢぢるべきぐち屋凡ひ
きへぐそつるもありル性おるへぐ
てるもものるぐ乃ぢてもあつまわぬ
るぐぎぬるぐぎぬるぐぢるさね。裳乃腰さし
化粧し
けさうずるるぐぢるもいるそ。
かみぐどいるあすわるはるぐ
けるぐ足ゆるぐ乃ぐるるんわる
らせまるるぢるしゃでまるり

裳乃腰さし
経なるぐるるる
かみぐどいるあすわ
ちのるはあるぐる
明日を第一乃時と
裳をけづりつるふ
さるるり

扇もせてくるゆる人おわつるぞ扇を誰しもあく扇をもせうて侍ハこゝ
みつとあり人おりてくるまゝ出るまゝ
やてやうたとの
問ふ侍らうき立て彼女房乃ヨ所ハ
やてゝ侍堂一度侍と
いへば侍かしとくもん
とこゝどまて立りと
ひあて。孫よ宿
のけよ侍出りしたへば
明るゝてゝ

三四乃きみ　そゝ所
ハ姫しこの男ゝ
敦忠朝臣の小方し
四男ハ一条院の侍人
しげ殿ゝ筆也物語也

あもしぎりつる。扇ひとせてくるゆ
れ人おりつるぞはくやてぞ
とゝ乃ぞとうきゝ
あけ也目とさ出ぬ乃殿のゝ
ひさうりうんさゝよせてのゝぐき
とて。あるゝぎわどのゆくゞよ
まぎうぬくたきゞるとゝわゞも
ハとつちげあるゝ。乃殿よ殿
せのへばえゝもゝふおりきて。まゞ
女房車よのせてせあふへと侍ずと
て。ゝとのうちよ文。たけいたや。三四の
きみ。殿のうへ。を侍おとゝ。ことゝ

三井ちうみくおります。車乃左右よ
納言三位中将二位ゝ。すゞれうちあけ下
すゞれひきあげくのせあふゝらうむ
ゝきくゞふあゝぐかれあやあん四人
ばかきゝそよたゞのくれとゝび
ゝてのせれまわおゆみしやちゝ
ゞふゝふ侍ゝうけせうありしよ
のけねゝ。ものうちよゝうゝ乃侍用
ゞも乃あふ文乃侍ゝの又ゞゝと侍
後ぜんハ文よ侍ゝきゝすかおりゝ。弟
ゝあせけのゆれハはゝろひそゝる髪
ゝおゞあやすん。やゝあかゆゝゝゞ

ゝる所ハしれてゝふあゝ
皆一度よのゝぶすぎ
れくゝもけんをゝや
あゝりあゝけて殿
ゝしをゝんゝゝ

車のもとふ　伊勢こ陸家
乃すだれわげ〳〵のせう
ぞのもし

それとくふれをうこまて
ハいきつきぬるこうる
加りさにあわひをうも
せず。ころひめぐりしを
ふれしせく〳〵車の北
まそびゆきうきーうう
まーうーを

女院を　女院心東
三条院注よ一条院の
院母なり

女院こ東心
女院乃院車とそ
うの心しそ女院乃
院車乃数をいも
ちりハ尼車　彼寸
乃内四ハ尼尺を(ち)の車
とうり
うすーみ乃げさきぬ
尼もむーハ落髪乃
きぬそそるし
うの女房乃十　彼寸
乃内し第一乃女院の
車次ち尼車四次り
いぞ房の車十合て
さめし乃を(ち)車簾
うりとうし　老女
すしそて裏ち衣ある

女院乃院車こめる十ゑ
女院乃院車とそ
うの心しそ女院乃
院車乃数をいも
ちりハ尼車　彼寸
乃内四ハ尼尺を(ち)の車
とうり
うすーみ乃げさきぬ
尼もむーハ落髪乃
きぬそそるし
うの女房乃十　彼寸
乃内し第一乃女院の
車次ち尼車四次り
いぞ房の車十合て
さめし乃を(ち)車簾
うりとうし　老女
すしそて裏ち衣ある

みふまつりぬ。それわ〳〵せのいくのちそ
ハ出させのふ
うふなどりぱさーなのりてぐ
れ車ごめる十ゑ。ちりハ尼車。一乃ち車ハ
女院乃尼車し
乃車ちりそれよつぎて尼のくる。
ちりロよりすいさうりずーうとみ
けさきぬるどいみぐくてーずれいあげ
ず。下すぐわれとうすいろりもうすし
こきーはぎうで乃女房の十。桜のり
きぬうすいろのもーあをををわうぬと
もりうぎぐもいうぐうちあめりーは
とうーのあれどーしハあさぐちう

女院出院のちそ出院ちうー
紛れる女房の中
女院出院
いう第一の車し
四ツ乃尼車し
尼うるを
表白裏赤
裏濃乃紅のを押わて

[illegible]

多の事熟し　かすみわたりたるよ。女房のたうぐの白ひ
あひ　ぬぎすてたる衣　きぬ　ぬぎすてたる衣のうへ
ぬどよりわらはなるかめのうへおりきたる
かぶりもの。関白殿　道隆　こちたはぎたる殿だち。
おとすかぶり。女院をうつきまゐらせたる　女院の御車
らうらうしうめでたし。これらの人なりわさりぐ山
車ども　女院のおくるまゐりたる　の二十立あるべきもの。ふたり
乙ゆんうつ。川の出させ給ひぐ。あぢまち
きこえさすらん。いかなんとぞ　そもそも女院の御行列　あるお
ひきこ出さりぬ。をすこれもくくしひれ
あぢの風ふき吹やれるいとおかしぶぜんと

[illegible]

青赤濃裳　裙帯　頭かけ　宋女の出立

えひくめの　ちりぬれさ
しぬき　蒲陶染織の指貫。
宋女をおこの出立ち
ちぐぶ。むすこ。ハ女
房もしてふのる時ハ
さぶぬきをまとも
作襖の形式の時
走嬬　平絹の指貫
西宮記に行ひ
又堂侍命婦も張袴
乃上り平絹の指貫を
男のごとくまて馬よ
のりく陪襲の形式
供をの事一条の
禅閤の秘訣なり

うらあけて
ひらの毛立あぢ
ぬもきこ　あぢ

[illegible]

ゆめ　イ典系ハ　遠圖　とて
ぶ　とぶまさが立る人なり。
えびぐめのまちの乃ねきをきれ
たぶまさハ名ゆるされよりを山乃井れ大
納言ハわるひるひくく皆のりつぎてしてる
に今ぶ陪こう出させふぶていとて
きりつる　女院の御あり方の
ぶりとくわ。和月をるぐいこ乃わるれ
本のもの　まのうるちゃ
乃ぶ　佐京の御輿の御綱を洗ふ
陪はる　りて出させふぶこう乃帷子
乃うち　ゆぎきるぐぶまとにいらの毛
あぢ人乃いてさうぐとうず。和

のちよりみあてうん人をかうちはべ。
あらるるういうう。牧いくそでかるだお
よあれはふろうんと我身をかゆる。ぬこうるこさせのふれで車
乃ちぢども人ぐるひよかきおろうち
つるぷうらもけくぷうらの乃ちろう
はぐきさる心ちのめでふ無あるを
門乃ちとふこるうらうのぐ乃ちぷ
子こるるかたをひさうの音つみの
ちろうあ乃とおぐどいづくの備の

さくのちよかくうん人
髪のうちてあでつけ
しもうけれど
あきの髪のつるて
みあきんもうん
とし
車乃ちぢども
女房乃車ふ牛
をやとめて榻をる
をかうときあつる
とみうにかけて
ぬうちうんとする
うる
こるるこのぐして
樂は高麗の系唐の
系てあり絵
あ

のちつるあぐふ
ぬきふ系車せ
えれぐるうるる

きのうろきあるる
あるうぬうして髪
のきくるうれく

ひぐきのぐくやうにおがゆ内よ入ぬれぐろ
いろ乃弾乃あぐろうよけとはあをて
かけうるへいまんあぐひさうるぐぐ
てうでよ、山せうおりぬ乃ぬさうきる乃
車をうやうよせられバ又山殿ぐうの系のひくうおり
ちうの山殿ぐうの系のひくうおり
今すうあふけせうあるる大納言殿
いとおくうきうけうて法ちうぐねの
きりてあぐくぬせけうてすれうち
あげくぐやとのふぐぬろひうぐる
くをとかうきぬのけをうくうあや
ちふありうんをいろうさあるさ人

[illegible]

[illegible]

[illegible]

それハ殿の太夫の
御堂　みたてし
それちかくこれ出ぬ乃
てきてきて相をはな
くてり

後の世ものして
女房乃供をすくしく人よ
ひとれ一間しつ侍
をきて又殿乃侍
ものもあて人ハ人目
ひとりそ明よりて侍
を堂殿乃縁をせ
ものへそれを移く移
ものをとてきてこと
はひさいあけさせ
さいと
陰次せは頼乃きくを
つかまつる

兵部督忠尹
九条右大臣師輔公男
法興院関白兼家公
と同母乃弟それ
陰公の侍ひとりて
の中納言八代
冨小路右大臣　顕忠公
の孫男方
侍重輔乃ひとり宰
相の君
宰相ハあるしふ
殿ハ侍ひを近くり
よりなんとこそ
相くてあれ
侍ちぞ
きてこと人ひとりく尺
ぬへ
宰九乃沼中納言宰
相とはかとこ人あんと
殿上ゆくこと内会人
百寮訓要云是ハ童殿上
ものすと殿ハ昔八武勇

久しうやてつかうまつれ殿乃太夫乃陰の
侍ものきく人よ尺ぬるおすのとかきね
あくこそ乃侍ものあんかりと人
ひあんくことふとかきねぬいせものへ
殿ものすくこと
ものくよりくとすきそ
うちわつせものくいあきこうる
ものはくこ乃いさうとりてきくく尺
ものすくうきさんかきき
えさせものくこ人
三尺乃侍きちやうひとりひをさし
ちくこすさ乃くくこそハきくうの

うちあてしこそ一ひくをあくさあるよ乃
をくおくこ乃上よきさて中納言乃ふ
とりふこ殿乃侍おちの宰相ものくこ
ときそくるくれ侍ひとり宰相の君と
小海乃侍大臣乃侍孫うれ二人ものくく
尺ものおけ侍ものくくわくく宰相ハあるよ
ぬくうへくこものくこ
侍くくよさくくこと人いくくく尺
侍ぬへくとやせばさくとりあくさ
ものへばきくこ人こ殿上ゆる乃くくこ
れりあるとわくハせんこおくくこと人へて
むやくこ人ものくくこ人ハうくよ入ぬく

を申ぜんとて、内
今人をば、東宮、
さん、ぞ、ぞ、ぞ、
すると、殊に服ぜず
て、殿上の間より、
内今人、ぞ、ぞ、
ぞ、ぞ、服ぜず、殿上
ぞ、ぞ、内今人、
あ、ぞ、ぞ、
ぞ、ぞ、
あ、ぞ、ぞ、
れ、ぞ、ぞ、
あ、ぞ、ぞ、
ハ、ぞ、ぞ、
あ、ぞ、ぞ、
て、ぞ、ぞ、
退、ぞ、ぞ、
ぞ、ぞ、
ぞ、ぞ、
出、ぞ、ぞ、
ぞ、ぞ、
ぞ、ぞ、

陣より出給ふ。
ぞ、ぞ、
ぞ、ぞ、
ぞ、ぞ、

[illegible]中小八郎[illegible]上
[illegible]近衛陣をりく藝
中のごとくなれば
さしばらく又るほのの
絵をかくるはかの又
俄まぶしまりん
かしのぬさはわるく
さやうのあをきりまく
ほかのきぬのやうな
ゆをきりもち調とも
せいうりんのうやおん
は服うかくしの超
き色はほ侍郎の表
のすうくしほか紐
こうれハ姓をくびて
ほ侍郎しのあくは
ほくまそのさうれ
侍綱の中より威儀をは
侍面侍郎律師を
侍綱くいろこ侍郎そ
うすせハ侍綱のあよ
威儀をのくうう

図書寮法[illegible]く[illegible]戯[illegible]
[illegible]ほらんじく法服ひとぐわう
ざわはをおくくまぐひ三つくこれ
をくうかりアべかれさくばくしあさや
のゆをきりもちあくしくくもしのくくもいく
又わひぬ大納言殿すくまぐきぬまくるゲ
きくあひくせいうりのこゆほんせ
のくふひくくくまくくくりくぬまぐかき
や侍郎乃天あかくれうを物の法とくも
家乃けさくうすきくれほくくもきく
ぬきくさひくびさちの法やうみて女房
の中より威儀をくくもくくもあくくいくくり侍綱

伊用の戯言

陸奥乃[illegible]の法[illegible]

切調

伊用し

音薬

[illegible]

[illegible]

[illegible]

位乃高人さらぬ人さぐきはよりあ
ぐ〜こそあるなどげるぐ物めでる
き。物さわはりさ式ヲ乃せうのわまさ
ばかりわ。やそ。物さわいくせのおべー
まいわ。ゆ。ゆ。ゆ

法心おちぬ　法心の句ちつきてこゝろ。相違せる女院も法心おちぬれたとを九條錫杖　不空三藏乃作一生まとりそなへ　聲明えんせをなて　聲明ふすする事。湯殿乃歌をきけバ一切衆生菩提心をおこし。諸佛ほとけ　物ハ成佛ほとけ　切法ものきこゝろをのぞれば

念佛乃廻向　光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨　觀經乃廻向のこゝ

恵心人云廻所作業趣向於彼謂之廻向

哥　和歌の風躰なし

ものゝ　哥

ものゝ　哥

ものゝ　哥

わかいろのきぬきてれど　紫色のきぬをもかぬまるにまるれどとしの四し紫色い者さ
ありぬるーあり

さるはかりとて人ところのすりてすれてえわりし河の久まー川のせんさくとしてはかられしも人の上のもはたをてぬ
づくはあるふすれいもえせずとの四し
さわとも人をちーぬ
ちうちうぶゆるも山も
人の上ハ半ぬ紙すれど
をてい人のをとくいに
ぬをとをにおかり成
ローすをていんとも

心づきあーぬとをろのきぬをきてれどぬ
ひとハ白うてうぶ男し世ものすきり
てこそ

わろきぬを

河のみまいのやくつうひとるこそなれぬ
ぶ一川よあやをちくしあてしぬやをちくも
あるハりるるあのはーんさるハりうとをひを
よろぶの事よすれくしえあーー
紫色ぬこころへの長年ていめ紙をれもてれの事ぬいえぬ
ぶれをよきさあきとハをちるあのはーんさり
うーんも人をちーぬーぬーぬちうちぬゆるもふ
めり雅藻のるすをつひくーをちるすさせん
をすをいえんとはをぬをとみやををうるひて

さいえんとすと
いえんとはを
大事の雅藻のすり
をはとをぬをちるを
さやうーせんとすも
又ハ紙をいえんをは
べき事をとこをみをと
ひはーーてハいえん
するとうひ又ハ里へ
ぶんぶるぬぶ紙をぬ
はるるぬ成ぬ事
とるーべ
ーてをちてハはべ
きをあるす　ハ河を
ひーぶをぬ事をを。
ーてをちぶをぬ
あるもはーーぬべき
るもはーーすとも
ぬをとす定をのー
物沈の面くをーをと
直をもはーく。ををのをーぬで出付ぬ

ぶいえんぬるる里へ出んぬるるとをぶをて
はをわーー。ーてをををきてハはべきを
をあーぬぬ物ーちこをあうーきをて
ぬれハはひーーー

さくらがさねと
みそはぎ　ねえ　えそ　すあね　さくらがさね
みそはぎ　桃毋葉　葉云　禁色を　ゆるされぬ殿上人乃平絹の下襲を
躑躅乃打下襲　とゆ　それと　裏ハ　みのねそ　濃　とゆ　又云　濃下襲　躑躅　表
すわうとゆ　打下
ハねるとがさね　桃毋云　極練　うとゆ　紅　打　或ハ　うと　弱　又云　次色　自　とゆ
すわうがさね　桃毋云　すわうの打下襲　濃　又云　濃下襲　躑躅　表
乃　とゆ　ハねる　とゆ　又　或　平絹　桃色　人　毋　或　公　とゆ
さくらがさね　桃毋云　白　襲　とゆ　ハ　絹　を　表　裏　白　襲　とゆ　て　とす　或ハ
表裏共　濃　四月十月　更衣乃　ハ　暑　月　とゆ
おをいろハ　ひあふぎ　桃毋云　檜扇
ひあふぎ　桃毋云　檜扇
ものいろ　乃　花　ふハ　赤
青　とゆ　ハ　蒲黄　とゆ
いろハ　ものいろ　乃　花　ふハ　赤
おをいろハ　ものいろ　乃　花　ふハ　赤
あふぎ　乃　かねと
ひあふぎハ　裏の花　青　緑の青と
おをいろ　ものいろ　乃　花　ふハ　赤
ひあふぎハ

ハ二十の枝ゆ年乃ハ　白　とて　とぢて　糸
乃　あ　ゆ　り　と　菊　の　花　を
と　き　ゆ　ゆ　り　と　ゆ　ゆ　れ　う　と　り　二　三　す　ま　ゆ　て　ゆ　と　ま　ゆ　て　る　ゆ　り　ゆ　ま　き　と　女　房　乃
扇　を　ゆ　を　暑　ゆ　て　こ　れ　ハ　一　条　殿　男　乃　花　扇　を　と　ま　ゆ　て　ゆ　と　ま　ゆ　て　ゆ　と　ま　ゆ　て　ゆ

[illegible]　廿二社次第　第一八幡三所　春日神天皇
神功皇后　玉依姫　貴船　観音
年九月十九日行教和尚
於男山峯建立　中下略
大原野　玉貞法[illegible]
三年ヨリ閑院左大臣冬嗣
[illegible]氏神　毎月[illegible]
[illegible]　廿二社次第　第二
[illegible]　乙巳　振[illegible]
[illegible]　廿二社本縁云　[illegible]
今八[illegible]社　[illegible]
[illegible]　延喜[illegible]
[illegible]
[illegible]

て漏剋をなる者をく。そもそも鐘鼓をうりさ。花よりく丈の一剋より左近衛兵衛すなに女人丈の一剋あり。時を奏せしに丑の一剋より左近衛兵衛を相奉せに左近のつきのよのおなしのあきゆるハうかあるべしとて。時を奏せしに。近代頂信の比ハ漏剋と八銅壺うあを入くを。そそ。そ。第よ四十八剋をうけく。彼銅壺のあの三てて。一刻のきざをあらハせバそ一剋二ツあらせバ二剋しく。て四つあらせで一時。ここ。ハ丑一二三四丑一二三四ちどいき此漏剋ハ昼のきざれ。或ハ百刻るせらもはれど。式部紙ちの。ハ四十八剋をやく。てはとく四つのみうくぬさくとうう。伊勢物語ちまし。丑ちハ丑ちとうのそ。

ね九月うハ月ちぐく。そよのはねハ時をうの数子ハ九丑ハ八時られバ里入さきよそど。禁中より時を奏し。時の拍子をとハ漏剋うとぐひくゆはハ四づりりせ。こはかやきく。広沢りちはぐく。ぐきくうく。ねをこうぬ。里びさるとハ。里めやきくるし。平人をさくびさくと人とうも。延喜式陰陽寮云諸時撃鼓子午各九丑未八寅申七卯酉六辰戌五巳亥四

成信中将ハ人をうをて。

源成信。兵部少輔平親王男。長徳四年左中将。

おとの人のこをとうく。

ちうのひ。ハうり。

成信の直衣姿のなりゆ。

ちしくうぬうとせいハ。

夏うのうんとせいハ。

くる心をよくやくハ。

わるきこハをうちどのあ。

ひしに。ハちぐきうり。

心を分て。ぬきうの。

ちぐ。ハ。ぬ。ハ。

ぬをきし。例のきく。

くるえ。ハ。

ちとちるよ。ちとて。

実ハちうきぬ。ちが中。

こと人のうまれて。他家。

平氏を氏子ハ。ハ平兵

成信中将ハ人をうをて。

源成信。兵部少輔平親王男。長徳四年左中将。

おとの人のこをとうく。

ちうのひ。ハうり。

成信の直衣姿のなりゆ。

ちしくうぬうとせいハ。

夏うのうんとせいハ。

くる心をよくやくハ。

わるきこハをうちどのあ。

ひしに。ハちぐきうり。

心を分て。ぬきうの。

ちぐ。ハ。ぬ。ハ。

ぬをきし。例のきく。

くるえ。ハ。

ちとちるよ。ちとて。

実ハちうきぬ。ちが中。

こと人のうまれて。他家。

平氏を氏子ハ。ハ平兵

わらきをんなとことばをかはしてゐたるを
をとこあるものいとくるしくおもひて
ものさわがしくもてきたるぢぶちなどよりあがりぬ
まもなくとのもりのかみ（地下殿上人）
ぞうしきぶのたいふ（雑式部大夫）
ぞうしきぶのたいふ（雑式部大夫）
ぞうしきぶのたいふ（雑式部大夫

とあるをもていはゞ
やとくしぶ宮時ハ法の
まゝにてきてこそ
あるべけれ心あきぬ
なるべ
例のいとこそ
おもはせきこゆ
とゝいふゆへ前のひさ
しをもいふ

あるいはつくるんを
山をのなやとめ
ぬるもし。
ぬるはくくやと
はるすゞ法のあや
しむ沼

はてはもとゞ
りなりて　彼手の沼は
見ぬ物なりなりつゝ
ゝとも
ひゝふ

さハいひあうすぐ
をあけく女をつゝぬぼとめて例の
ひさしより人の西ちさ
ゝ物いつをきけ
ゝ西乃いとう
ゝ月もきこゆる人なんいとおもれある。
月ごろあがつゝ
ゝつきまなりとも。
さてぬれらきこゝぶらきこゝすもみる
ぬるとをあゞていつゝ
ゝ
ぬるはくくやと
きの
ゝ乃ゝ
ゝ
ゝ山はゝうちきりんゆる人乃ご
ゝ
ゝ
ゝ

[illegible]
[illegible]
[illegible]

くらのつかさの将とぞきこゆ
それらの所ふつかのうるはしくもあるかなとつけて
まゐりしたるいとをかしくもあるかな
ちかぢかの西洞四冊子
中納言のひとをかたらひ
あるはかはらんどうの
乃ちをうめやどすれば
結婚かくしてひきこもり
すきものとかたりぬ
名をかくれたる西の
の将と人心ざしかく
てあのかるよりあしいと
ちかぢかの交際のか将と
ものとけちをもんけ
きでしおくたる西の将
のはかるをてあのか
将とどきこもしぬ
のかはらかるや
れしよべおとこひの和
とかはしがうるはしれ
ものしいとこが

か、こちらこんがめでこうこんぞふうるの
お将とどきこるおちくぶかかねそどふ
うえれをようなとひのあもこうぶし
うなこうれ兵あひこぶふきる
くわこんぞでハはの風ぎの吹あ
はくきあきこはのこてなっ
きことあこうん雪こうことめてこれ
ものはこはこはこはこはこはこのび
こはこはこはこはこはこはこ

よべとしのあけぬれば
しらくもかすみたれこめ
ぬるあやめ草ふき洗ひ
くるがきくるまよりは
ゆかしくもあるかな
あけくれて宮のうちは
夜明れはみなとぎ
物のけさはみな
ねばさしのきもし
たゝみ所なくはば
のうちへ吹くるかぜ
は墨のくもりも吹
とゝめあるなり

あけすぎぬ夏
のはつかぜ
あやめぬれば
ふかぬ
ふきをは墨ぞ
やれ可考

あつさいとはるゝ
宮ゐのくもとそ
ゆ

ひきわけて
封用は墨ぞ
墨ひゝ用ふるまゆ
ゆるさぬ所なく
白さえ物ぬ
おくとこそ
ぬれてそ
ぬれぬ
ぬれぬ
ぬれぬ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

上代の也山經よりの出家を請持とる功[illegible]あるまよりてあるまのま
乃始りハ中ノ備ぜるくるくるや。延喜式四六左右衛門式云御斎會九
正月講最勝王經所進衛士十五人并雜色一櫃其種子稻五十束請山城国
便郡簡備為十三荷亦進會所。凡正月講最勝經所進毒柿八株くく
これ叫ぶ大乃出作乃摺衣ゑとるるるあるるるや。又法秘密ゑう方法の
按非遠使著庭中座紀察非遠と為る記事深年うあり。左右出乃
推佐宣旨をうるうて按非遠使作とある事ゑれば叫すう衣やりて
きくくきき國佐ゑるとゆうりやイ本さ法よ。うんぢさ。わるる乃法修法と
あり。尊勝大明王乃法や。經云此尊勝大明王是世間母一切衆生咸同其子
ミ。尊勝大明王經一卷あり。西天竺譯經三藏施護譯

春乃法後經　お注云事根深云二月分
ゑ大般若經を百度
ゆて講ぜるる。四ヶ日
事ゑて才二百小小
第ゑて後ゑ第ゑと
ゑうりりりりミ延喜
大政官式云凡春秋二
季於大極殿轉讀經
并史書當行事物

春乃法後經　燈國光乃法修法　神めいる
くあるれるよ神明乃陣こうりでうおう
ろれ。左右大將中ゑ將あるのみうし
乃つゑ法修ひるふとゆうけ。果ぬるあり
大將のゑ中ゑのうりりりのるうん

後ゑ月親王以下未着
空就殿上座遣近衛
少將勞問

燈國光乃法修法
妖星孔くるる。国王大
臣ゑの居所の彩繪ゑくりとるる。一切經藏乃櫃函ゑ大國德金剛
佛頂燈國光如來消除一切災難陀羅尼經一卷あり。西天乃譯經三藏施護
乃飜譯ゑり。又佛說燈國光大國德消災吉祥陀羅尼經あり。不空三藏
の譯也。經云念此陀羅尼一切災難皆消滅不能為害ゑ
神明の所　お注延喜式四十五云凡大雷時左右近衛陣御在所
えんぢんろくくの出屏風　坤元録屏風詩と為るゑ能よかきく屏風ゑ朗詠
乃覚明ゑ注ゑ坤元録屏風詩と為るゑ能よかきく屏風ゑ朗詠
ゑんぢんろくくの出屏風　漢書ゑ云ゑ事ゑとるをゑかきく屏風ゑ九ハ推ゑ
きこゆるる。前漢書八十二帝記八表十志七十列傳ゑ。百世八卷班固撰也後漢
書八十帝記八志八十列傳ゑ。百世八卷范曄撰
月次乃出屏風　年中行事ゑ云ゑ月次の法修ゑ
ゑ。
きこゆるる。

おちぬべきをばつとうちざるべきぎはまでく
火かけ川とせてるるぞ火乃おわきてて焚
ろそくてる雨あくめでるきをぞこるうちある
をい乃ちあくよりなこーゆるこういてう
うれなれぞなすでいひくゝかりきゆんも
ちくすねるるぞこと人乃をてすみれ
ておこすこいとめくゝそれざれどめぐり
ゝをきて中ゝ火をなゝせるいかゝ。
ケ示火をおざるりこのさやわくゝすしを
きねをきるいてきよ火どもきて
れがてとむつ
ゝ別のゆゝうゝ
雪てしゝ
ゝ
ゝ

彼童は髪をかしらにかけて立走りてとりもちあるく。いかに涙無き世の民は柱を立てかくしたるを見て、えをさといかとぞ思ふ。

さうしの人をとる　さうしの人従者しるべ

柳　つくづくし　柳の花　柳の糸　柳の芽　柳の眉　柳の目　柳の髪　柳の枝　柳の葉　柳の木　柳の根　柳の下　柳の陰　柳の風　柳の雪　柳の月　柳の雨　柳の露　柳の霜　柳の雲　柳の煙　柳の波　柳の水　柳の川　柳の瀬　柳の淵　柳の岸　柳の山　柳の谷　柳の里　柳の宿　柳の家　柳の人　柳の妻　柳の子　柳の親　柳の兄　柳の弟　柳の姉　柳の妹　柳の師　柳の弟子　柳の友　柳の敵　柳の仇　柳の恋　柳の涙　柳の歌　柳の詩　柳の文　柳の手　柳の筆　柳の墨　柳の紙　柳の硯　柳の机　柳の灯　柳の火　柳の炭　柳の薪　柳の木　柳の枝　柳の葉　柳の根　柳の実　柳の種　柳の苗　柳の芽　柳の花　柳の色　柳の香　柳の音　柳の風　柳の雨　柳の雪　柳の月　柳の日　柳の星　柳の空　柳の雲　柳の霞　柳の霧　柳の露　柳の霜　柳の氷

仮拾遺三ノ[illegible]
ちよせをとすふち
てきつはちとゝ久
しうりく
けいせんるとハ兄しねこう
銀五郎へとちん事
と、兄しぬこう銀ながら臆しくれとの事
平のうへ
ほかのさひしきハ仕不
りと中ひい作くぱ
まの出つれくをとて
里屋一作ゝまつ
やどくちつぎ心をふ
くめくる高くぱ山五郎
をしよ載集ゝ入
こよひかれ
百姓ゝこと
お將ノ世ゝ
ねてうせやち作ん
ゝ
ほかを行ゝ

作せこよの出さのさるハをうゝぬこち
すれどけいせん事とハ行ぬこう
ほうじ
平のうへよくゝねるまの日と
ところゝもあつめつ
宰相ノ
わこうふこのこと乃ゝ
あり作ゝんずんとておうきてよ
いとれぱきの乃ゝ
おこうゝとふくゝぱうくをきい
ゝ
ほかを行ゝ
足うけゝ
ゝ
ゝ

[illegible]
江次第十八御佛名の
ところよる云。初夜乃師
道師来大法師[illegible]
二前三
子一前二

[illegible]ひろいみ[illegible]ちぐ
盆米 [illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

月新乃そらさらよ
世の面和〳〵みゆる面
ありぬ清かあらぶる月
るるべし

月〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵
朗詠八月十五夜ニ
秦甸之一千餘里凜々
氷鋪　凜々ハ寒貌

月のわさ〳〵ある新の
うつれるハ秦甸の長き
田面〳〵さも〳〵冷きき
氷を敷るやうなり

文の内みれそ
左官そどの内沈みた面
乃ちつつこのすそど
をかめ行るとこそ所る
ハ我自宅れうへうてお
れをゆゞ又紙書そどの
なのみそ〳〵ゆゞ嫌きと

しゝばおりこと人に問べし。月新乃そらさ
あさるよう面ろざるのへすでり入るをひき
見ふりよりて世の面と乃ろうるるすし
よせあ〳〵ちよあされ〳〵笑ふとおり。

月〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵
ふと〳〵おそ去けるとこの詩を
ふと〳〵ぜん去〳〵おそするハ乃ぢう
おうて。我一ちも行るとのまりきう。
いく面乃ちう〳〵あるもにおし
ケやぼう〳〵する人ごと乃出あつまりて寄ご
我自宅とかめてきて〳〵文乃内みれそ乃
乃内ちすめてきて〳〵文乃内みれそ乃
事どもひろ行る合せるをものが
見〳〵そ宅家あるうおく〳〵ゆうこうおり
れ

春曙抄十一終